

## アラビア半島アデン湾、オマーン湾のイスラーム遺跡踏査

## Archaeological Survey of Islamic Sites along the Coast of Aden Gulf and Oman Gulf

佐々木 達夫

## はじめに

海を通して交流した文化を、考古学資料から探る研究をしている。アラビア半島ペルシア湾岸のジュルファル遺跡発掘が1993年度で6回目を終了し、出土品や遺構の整理・研究を開始することになった。そのため、アラビア半島のペルシア湾岸と近隣地域の比較検討も行わねばならない。しかし、アラビア半島沿岸地域に関する発表された情報量が少ないため、1993年11月にイエメンのアデン湾に沿う地域を、1994年3月にアラブ首長国連邦のオマーン湾に沿う地域を、いずれも短期間であったが情報収集のために訪れた。本稿はその際に得た遺跡と遺物に関する報告の一部である。

## 交易都市の遺跡を求めて

イスラーム時代に入ると、インド洋はアジアの東西を結ぶ長距離貿易の場として発展する。大量の物資が中国、東南アジア、インドから西方へ運ばれた。同時に近距離貿易も盛んになり、東アフリカや西アジアの物資もインド洋を利用して運ばれた。オマーン湾はメソポタミアに通じるペルシア湾の出入口、アデン湾はエジプトに通じる紅海の出入口にあたる。インド洋沿岸の各地とペルシア湾、紅海を結ぶ航海に、この両地域が果たした歴史的役割は大きい。とくに、ペルシア湾内の遺跡と比較する資料を入手することが緊急の課題である。

最初に、両地域で港湾都市遺跡を発見し、現状を観察すること、その立地条件を知ること、遺跡の表面に落ちている遺物から遺跡の廃棄年代を知ること、そして、ペルシア湾および両地域の比較を行うことが、当面の踏査の目的となった。採集・観察した主要な遺物は、腐食せずに遺跡に散乱する陶磁器片とガラス片で

あった。

## アデン湾の調査

旧南イエメン海岸地域のイスラーム時代遺跡踏査の許可を持ち、サナーに1993年11月22日着。同日、イエメン General Organization of Antiquities & Museums 総裁の Prof. Dr. M.A. Bafaqif バファーキーフ氏に会い、踏査許可授与の礼を述べる。アデンでは、アデン地域の Department of Antiquities 長官の Mrs. Raga Batawil ラガバタウィル氏に会い、アデン周辺の遺跡と博物館を訪ねる準備を整える。地域ごとに案内いただく博物館員についても手配いただく。東に進み、ムカラ地域の Department of Antiquities 長官の Dr. Omal al-Aydrous オマル・アルアイドルス氏に会い、イエメン南部の東海岸地域の調査支援をお願いする。

## アデン湾岸で踏査したイスラーム遺跡

今回訪れたイエメン南東部海岸部のイスラーム時代の遺跡についての踏査知見は次のようである。

(1) コーダムセイラ Kawd am Saila。遺跡はアデン郊外に位置しており、イスラーム時代の遺跡としてよく知られる。周辺は平地であるが、遺跡の丘は10mから20mの高さがあり、1kmほどの径をもつ大きな遺跡である。表面の砂が風で吹き飛んだ部分は、日干泥レンガの家壁の跡が見える。多くの土器と施釉陶器が表面に散乱している。表面の破片を見ると、すぐに目に付くのは次のような種類。13-14世紀の中国青磁。17-18世紀の中国染付。タイ/ミャンマー白釉陶器皿。タイ青磁。イエメン赤色砂混じり素地施釉陶器(黄釉、緑釉、その他の単色釉がある)。イエメン施釉陶器で、文様の描かれた種類は量が少ない。イエメン

赤色砂混じり素地無釉土器。イエメン土器は無装飾の破片が大部分を占めるが、刻線文のある破片も少し混じる。フリット陶器は稀である。ガラス片も多く見られ、容器片、バングル、ビーズがある。ガラスの色は、青緑色が大部分である。遺跡の表面には、ガラス窯跡の痕跡が残る。ビーズ、青銅コイン、青銅片。13世紀中国青磁と17-18世紀の粗質で外面口縁部に円形文が帯状に並ぶ福建省染付碗は、広い地域に普及した品。遺跡に陶器窯跡が存在した可能性もある。

(2) ラーラ Ra'ara. 遺跡はアデンの郊外で、ラヘジ Lahej の北東に位置する。ラーラ村は、平坦な畑のなかにあり、低い丘上に村の家が建つ。灌漑用の溝が、村のある丘を切って作られており、その溝の壁面に日干レンガを積み上げた家壁が見える。溝を掘ったときに盛り上げた土砂の表面に次のような陶磁器が見えた。16世紀中国染付。イエメン青釉陶器、青緑釉陶器、白濁釉陶器、黄釉陶器、青緑釉と黄釉の陶器、白濁釉上青彩陶器。この資料だけから判断は難しいが、16-19世紀の小さな村があったことを推定できる。

(3) ジャブリン Jebelain. アデン郊外にある遺跡で、ジャール Ja'ar の西側に位置する。ジャール西方のワディバナには水が流れ、畑が広がる。ワジ西側に低いいくつかの丘があり、その山裾で陶器片が見られる。遺跡の南側は平坦となり現在は農地になり、北と西南の二箇所に岩だらけの小山がある。その間の山懐に抱かれたような範囲の瓦礫内に遺跡がある。水が流れた自然の小溝に土器を埋めたオープンと石積み建物壁が見える。オープンの土器の周りは石を貼付。遺跡表面に土器の量は少ない。短期間だけ住んだ小さな遺跡のように見える。施釉陶器は9-10世紀が主である。イラクの青釉陶器、白釉陶器、ラスター彩陶器。現地産の可能性のある無釉土器。化粧粉を作る長さ25cm、幅11cmの擦石あり。アビアン博物館に入れる。

(4) ハンハル Khanfar. アデン郊外。町中の空き地で、土盛りがあり、そこに遺物が混じる。穴の部分はごみ捨て場。16世紀の中国染付。環境悪し。

(5) アルカラウ al-Qaraw. アデン郊外。1kmを越える広大な遺跡。12世紀の白磁、13-14世紀の青磁、

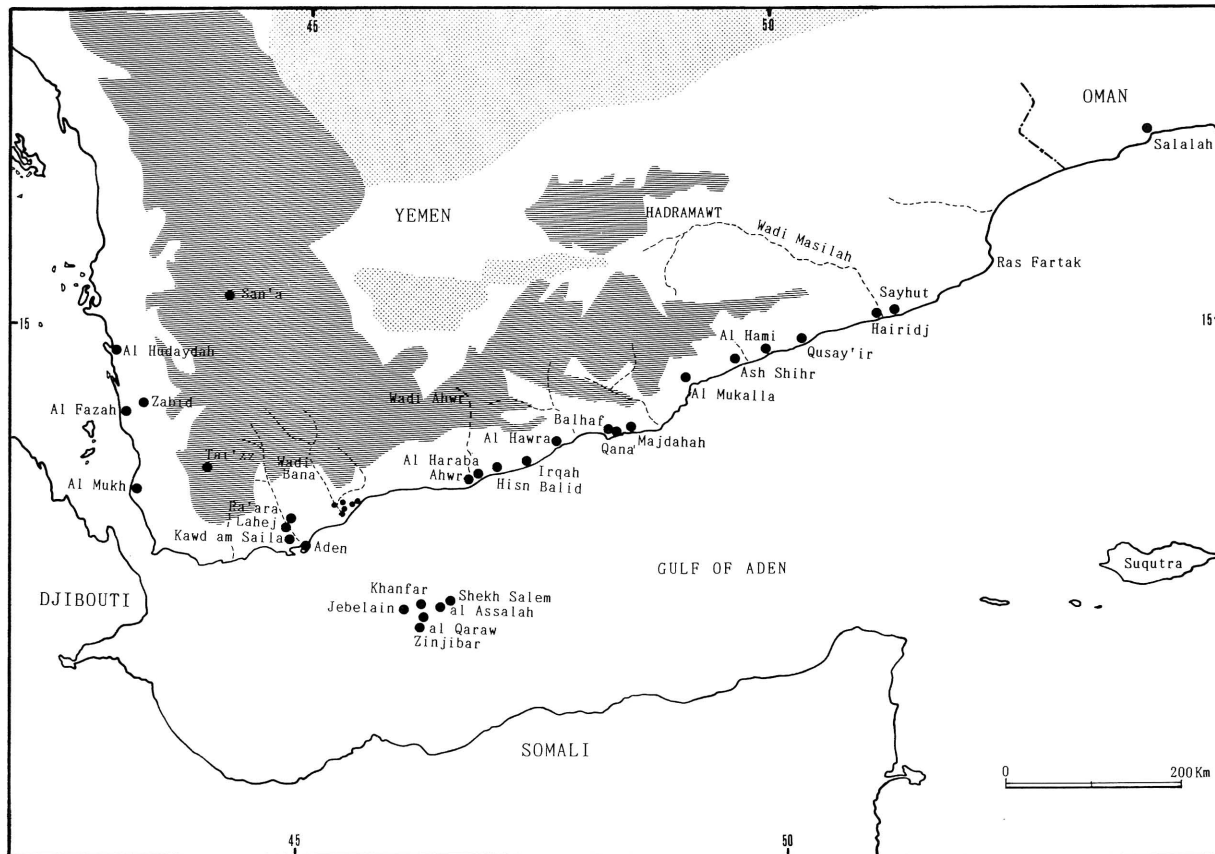


図1 アデン湾岸のイスラーム遺跡

16世紀の染付が一部で拾えるが、青磁だけの場所が多い。周囲に家屋はあるが、環境は悪くない。20 m ほどの高さ。

(6) シェイカサーレム Sheikh Salem。14-16世紀の遺跡。シェイカサーレム村の東側で、道路際、海まで2 km ほど。平坦地のなかの小丘。漁村か。環境はいい。青磁と染付が主となる。砂地の表面に遺物が多い。

(7) アルアサラ al-Assalah。日干泥レンガの家壁が残る。表面の遺物は、17-19世紀のもの。ベトナム／中国染付、イエメン土器が見られる。イスラーム施釉陶器は少ない。

(8) アルハラバ Al Haraba。ワディアフワルの東側で海岸から4 km ほど離れた大遺跡。13-15世紀の中国青磁。ただし、南側だけ中国染付があり、廃棄年代は16世紀。中国青磁の他は、イエメンの黄釉、緑釉、青釉下白盛り上げ、白釉上マンガン彩などの陶器。バングル。表面に遺物は少ない。イスラーム施釉陶器も少ない。

(9) コルフアル Kholfar。アデイスの近郊に位置する遺跡。海岸の都市遺跡である。表面採集品は、17-19世紀のもの。中国染付、イスラーム土器壺、イスラームガラスのバングルを見た。

(10) アルハミ・アルフォギア Al Hami al Fogiya。海岸に沿う町アルハミの裏側にある遺跡(写真1)。現在の町の裏に谷があり、谷中に遺跡となった古い町跡がある。温泉が湧き、緑の野菜畑が広がり、椰子畑もある。

海岸の町から狭い谷を抜けて遺跡に入ると、崩れかけた日干レンガ建物が今も残る。一部の地域に14-15世紀の中国青磁が見られるが、大部分の遺跡の表面には17-19世紀の中国染付が散らばる。

(11) ヘイリッジ Hairidj。サイフットの西、5 km に位置し、海岸とワディに沿う遺跡。南が海、東はワディ。ワディは幅300 m ほど。海岸は平坦で、ワディに近い部分から細長く西方に400 m ほど小台地が張り出す。台地の幅は50-100 m ほどで、しだいに西ほど低くなる。石積壁住居が東西方向に何列か並ぶ。住居のある台地の北は数十メートル幅の凹みとなり、その北は山際まで続く台地となり、墓地となる。墓地は住居に近い部分、長さ100 m ほどに広がる。さらにワディに沿って幅50-100 m ほどで、山の方向に長く延びる。2 km ほど住居から離れた部分に文字を刻んだ石が立つ3基の墓がある(写真2)。他の墓には文字を刻んだ石はないようで、石も立っていない、丸石を並べた墓が大部分。表面の遺物は少ない。中国染付16世紀が主。青磁は僅か。土器はほとんど見えない。イスラーム施釉陶器も少ない。ガラス容器片も少ない。ガラスバングルも少し。短期間の居住地か。自然の台地の傾斜のままのようで、建物崩壊土が厚く堆積した状態は見えない。風で土砂は吹き飛んだか。

#### オマーン湾の調査

シャルジャ首長国のオマーン湾岸のイスラーム時代遺



写真1 アルハミ・アルフォギア



写真2 ヘイリッジの墓碑

跡踏査の許可を得て、1994年3月末から4月初に、ディバ、コールファッカ、カルバ、コールカルバの4地域を主に調査した。シャルジャ博物館長兼 Directorate of Antiquities & Heritage 長官の Dr. Nassir H. Al-Abboudi ナシル・アブディ氏, Mr. Essa Abbas Hussien イッサ・アバス・フセイン氏, Mr. Nabeel Ahmed Abdulla ナビル・アハマド・アブドラ氏らにお世話になった。この地域の海岸線は20世紀後半に大きく変化したらしい。砂浜やサバハは、岩山を切り崩した土砂で厚く覆われている。元の海岸の砂浜は残らない。多くの遺跡は最近20年以内に破壊されたと推定できる。

#### オマーン湾岸で踏査したイスラーム遺跡

(1) ディバ・アルハッサン DIBA AL-HISN (Al-Hison, Al-Hassan)。シャルジャ領ディバのワディ中央部で農耕地際の部分には、多数の人工の丘が残る。これらの丘は、海岸から1kmほど離れ、海拔8-10mのラインに沿って発見される。陶磁器片が容易に採集できる丘は、アルハッサン・スポーツ・カルチャル・クラブとオマーン・シャルジャ国境線の道路に挟まれた部分に位置する。これらの丘の北東側は農耕地と市街地の境となり、南西側はワディと粗い丸石の堆積する地域になる。丘の平均的な高さは2-3m、直径は20-30mほどである。30を越える数の丘が、1km以上にわたる長さの地域に点在している。イスラーム時代の墓がいくつかの丘の上、とくに南東部の丘に発見される。家の壁の痕跡は丘の表面に見えない。このことから、丘は最近できたものではないこと、以前の町と農耕地が丘と海岸の間に存在したことが推定できる。丘の表面には、18世紀以降の陶磁器片がかなり多く容易に発見できる。初期イスラーム時代の破片は非常に少ないけれども、いくつかは発見できた。12世紀後半の中国青磁碗1片、13世紀前半の中国青磁碗片1片、12-13世紀のスグラヒアト(多彩釉刻線文陶器)1片など、いずれも小片であるが、アルハッサン・スポーツ・カルチャル・クラブの前の丘で採集された。こうしたことは、中世都市ディバが海岸からこの地域まで広がることを示している。

(2) 海岸に近いワディ・アルハッサン Wadi al-Hisn,

near the coast, Diba。海岸とワディに沿う平坦な部分に、小さな丘が一つある。家はなく、新しい墓が丘の周りに造られている。丘の上から陶磁器片と土器片が発見された。石壁の痕跡が地表面に見られ、多くの珊瑚の塊と貝混じり石が地表面に掘り出されている。これは、古い家が地下に埋もれていることを示している。ここで発見された多くの陶磁器片はかなり新しい年代を示しているが、中国青磁2片は注目に値する。1片は14世紀前半の青磁鉢片である。他は14世紀の青磁盤片で、内外面に刻線と劃花による蓮弁文が描かれている。これらの採集品は、中世都市ディバが海岸に沿ってポルトガル砦付近からこの地域まで広がることを示している。

(3) アルガラビア AL-GHARRABIYAH, Diba。ワディの中で、現在の家と農耕地の近くに、いくつかの丘がある。泥レンガ壁の痕跡が地表面にまだ残る丘の上には、多くの施釉陶器と土器が散らばる。これらの陶器の年代は、主に19-20世紀であろう。

(4) コール・ファッカンの廃墟となった古い町 RUINED OLD TOWN OF KHAWR FAKKAN。廃墟となった町の南地区は、最近平坦にされ、家屋の基礎が地表面に残る。石造りの基礎は最近廃墟となった家よりも古いが、その両方とも地表面に痕跡を留める。この地域から採集された陶磁器の主な年代は、19-20世紀である。

(5) 砦丘 FORT HILL between the port and the ruined old town of Khawr Fakkan。小さいが急な丘が、港と廃墟となった古い町の間をそびえる。1968年に撮影された写真には、一基の塔が丘の上に見られる。現在、塔はない。丘の上と下の廃墟となった古い町では、出土品が少し違う。18-19世紀の陶磁器片が主に採集できる。しかし、17世紀以前の陶磁器が混じる可能性もある。多くの青色釉と灰色釉の陶器碗が丘の上に散らばるが、丘の下の地表面からはこの種類の陶器が採集できない。

(6) アルカシミ家の古い家跡 HOUSE OF SHEIKH SAID BIN HAMAD AL-QASIMI。アル・カシミ家の廃墟となった家が海岸に沿って、カルバ砦の向かいに位置している。家基礎の部分の周辺は、壁基礎を発見し修復する目的で掘られている。採集されている陶磁器

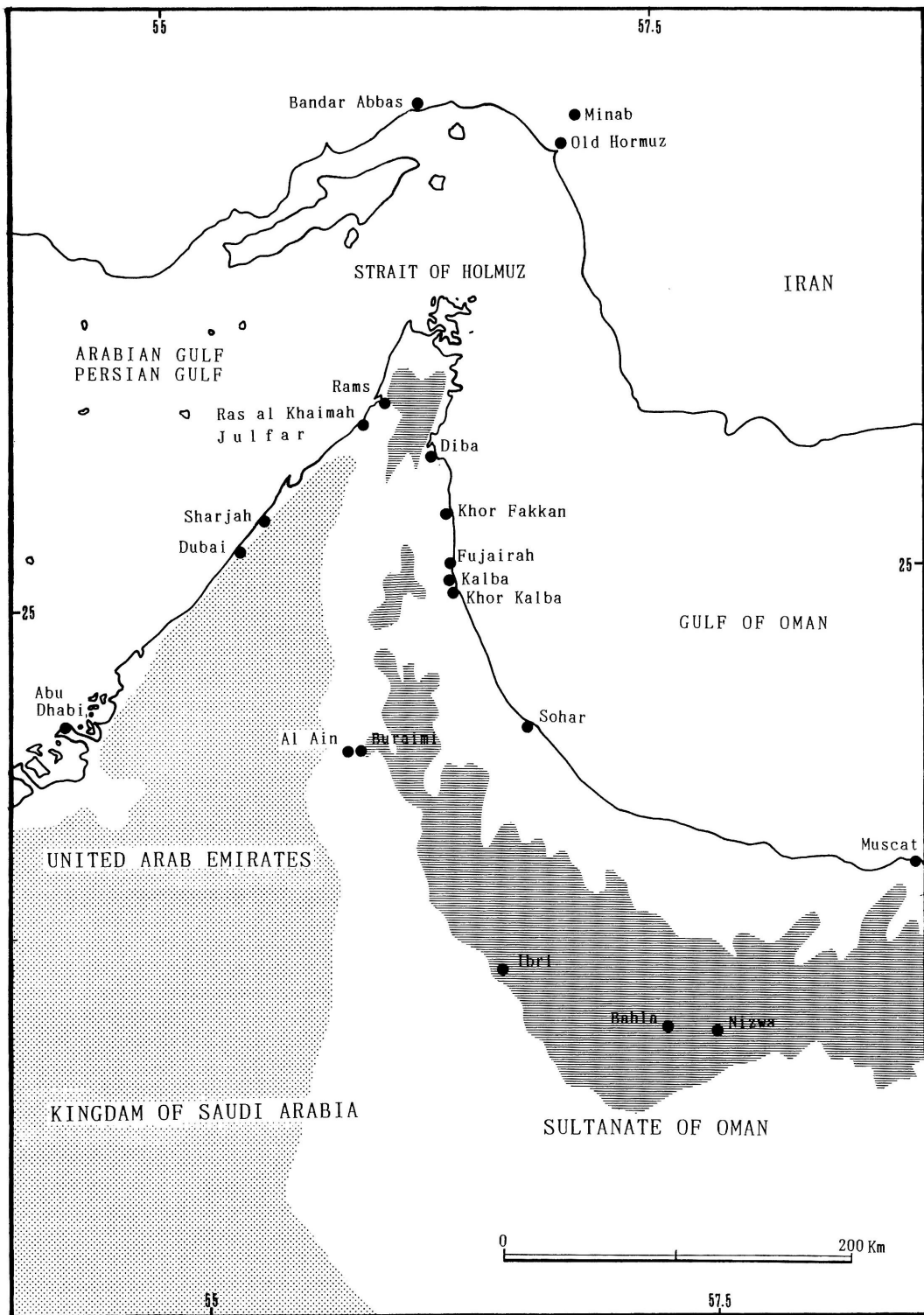


図2 オーマン湾岸のイスラーム遺跡

片，ガラス片，青銅片，鉄片などすべての出土品は，19-20世紀の製品のものである。この家に沿う海岸は，以前スークがあったというが，いまは海岸道路に

沿う緑地帯になる。古い町はこの家の近くの海岸に沿って建っていたのだろう。

(7) スール・カルバ SUR KALBA。スール・カルバ

(カルバの壁) はワディハミの南端と海岸に沿った場所に位置する。この地域には、地勢的・環境的に見て古いカルバの町が存在したと推定できる。しかし、現在の町中に砦や街壁は残らない。

(8) スール・カルバ西側のワディ内 West of SUR KALBA in Wadi。スール・カルバ町の西側にあたるワディハミ内の紀元前の墓地群の近くで、スグラヒアトが数片、Mr. Essa Abbas Hussien によって採集された。

(9) カルバ農耕地域A丘 KALBA GARDEN, Mound A。カルバ農耕地域A丘には二つの丘がある。それぞれ100mほど離れている。北丘は4mほどの高さがあり、径40mほどの方形丘である。南丘は2.5mほどの高さで、径は15mほどである。無釉土器のクッキング・ポットや施釉陶器が丘上で発見された。

(10) カルバ農耕地域B丘 KALBA GARDEN, Mound B。カルバ農耕地域B丘は二つの丘からなる。南北の丘は20mほど離れている。北丘は4.5mほどの高さがあり、径は40mほどである。南丘は高さ3.0mほど、径は30mほどである。南丘では、施釉陶器片が最近の中国陶磁器片とともに発見された。北丘では施釉陶器が発見されなかったが、無釉の土器片は南丘よりも多く散布していた。

(11) カルバ農耕地域F丘 KALBA GARDEN, Mound F。カルバ農耕地域F丘には、10以上の丘が見られる。英国隊によって発掘されている丘では石積壁が発見されている。無釉の土器が主に採集されている。

(12) コール・カルバ砦 KHAWR KALBA FORT, old Khawr Kalba town。最近になって廃墟となったコール・カルバ町の海岸に近い部分に位置する砦である。大きな方形の平面形をもち、角に四つの円形塔がある。19-20世紀ころの陶磁器片が大量に砦内の地表面に散乱している。

(13) コール・カルバ KHAWR KALBA, the section of the southern outside of the ruined town。古い小さな白いモスクがコール・カルバの港の近くにある。モスクの南西部、すなわち廃墟となったコール・カルバの町の南部に平坦な地が広がる。平坦地は、東が海、南

西がクリーク、北が最近廃墟となった古いコール・カルバ町に囲まれている。地表面は平坦で海拔7mである。家の泥壁の痕跡が、二百メートル四方の範囲に見える。18世紀以降の陶磁器、とくに19-20世紀の破片が地表面に散乱している。青釉下黒彩陶器、刻線文土器、それに少数の中国染付を発見できた。

#### 踏査の成果

遺物について。気候風土が同じなら、特産品も同じで、そうした地域間の貿易は活発にならないという仮説を立てると、メソポタミアへ向かうペルシア湾、エジプトへ向かう紅海の違いの説明が可能である。ペルシア湾の内と外の違いは土器などの地域的広がりを知る手がかりになる。遺跡の表面で観察される陶磁器は、アデン湾岸とオマーン湾岸で類似したものと、相違したものがある。流通する地域圏の広さが推定できる。ペルシア湾岸と類似する陶磁器の広がりがオマーン湾岸では見られた。しかし、ペルシア湾岸とアデン湾岸の陶磁器は相違するものが多い。

遺跡について。オマーン湾岸では、ディバやカルバの農耕地内や縁部で、小さな低い丘を多数発見した。その丘の表面から、土器の他に施釉陶器も採集できた。そのうちのいくつかは中期イスラーム時代に入るものであったが、大部分は18世紀以降のものであった。また、丘の内部にイスラーム時代の廃墟となった家屋が存在するかどうかは、明確ではない。アデン湾岸では、開発が遅れているため、残りのよい遺跡が多かった。

今回の踏査は期間が短く、調査方法も地表面から観察するだけという限られたものであった。先イスラーム時代の遺跡を発見するほうがはるかに容易なことである。石造り墓はワディのなかの地表面に今も見えるからである。9世紀から16世紀にかけてのイスラーム時代の都市遺跡は、現在の家屋の下に埋もれているかもしれない。適当な丘や遺跡に試掘を行えば、初期あるいは中期イスラーム時代の遺跡が発見されるであろう。今回の踏査で、発掘調査に適する遺跡の位置と存在形態をとらえることができたことは成果である。